

## 巻 頭 言

## 米国胸部外科学会に出席して感じたこと

渡 辺 洋 宇

(金沢大学医学部第1外科)



1月末にフロリダで開かれた STS (Society of Thoracic Surgeons) に出席した。私がこの学会に参加したのは1977年米国留学の帰りにサンフランシスコでの総会以来である。今回久しぶりに参加して、呼吸器関係の演題も増え、参加者も多く大学に成長したことを実感した。感じたことを幾つか述べたい。

まず第一には、プログラムの最初にこの学会での報告での用語、定義のガイドラインが明確に記されていることである (Ann. Thorac. Surg., 1988; 46: 260-261 に掲載)。例えば、手術死とは「術後30日以内の死亡であり、明らかに手術とは無関係な死亡以外はすべて含める。また30日以後でも手術操作に明らかに直結した死亡も手術死に含める」としている。この他、術後合併症、生存率の算出法、病期分類 (UICC 分類ではなく American Joint Committee の分類を用いると明記してあったのには戸惑った) などが明記してある。わが国では手術死は術後30日以内が定着しており、また生存率の算出法に長期経過後他病死した場合には癌死と同じに扱うのか、打ち切り例とするのかなどまちまちである。本学会でも可及的早期に、これらの定義、算出法のガイドラインを本学会誌に掲載する必要があると感じた。

次に感じたことは (いつも国外学会で感じるのだが) 演題数の少なさである。学会は2日半であるが、口演は72題であり、これに加えてポスターが1日10題、3日間で31題、計100題余りの少数演題である。いずれも厳選された演題であり、採否を決めるプログラム委員会の権限がそれだけ強いことであろう。また、指定討論者が予め準備されており、格調の高い討論となる。それぞれの演題はすべて未発表であり、いずれも新知見の報告である。発表後はいずれ "Annals" に掲載されることになるから double publication はありえないことになる。(国外学会でいつも感じるが) 同じ演題 (多少の modify はなされるが) を幾つかの学会に出すわが国での悪習は (?) 改めるべきと今回も感じた。

2日目の夜にフィルムセッション (10題で2時間) が組まれていた。この度、肺癌手術手技研究会、胸腔鏡下手術研究会が呼吸器外科学会の主催で行われることになったが、これを機会に両研究会を発展させ、本学会のサテライトとし、優れたビデオを選択して発表して戴き、それについて十分な時間を掛け討論する会にはいかがかと感じた。

学会の参加費は会員は無料である。小生は会員であるが、年間費 \$ 300 を納めると、学会への参加は無料であり、同時に Annals of Thoracic Surgery が送られてくる。わが国でもこの方式を採り入れてはという意見がある。実際、我々は年会費と参会費を合わせると、上記の \$ 300 とは大差ない金額を払っていることになる。しかしこの制度を本学会で直ちに採り入れるには幾つかの隘路がある。会長の金策の負担は少なくなるであろうが、学会運営、雑誌の発行を学会事務局が行うことになり、事務局職員の増員などの必要性もあろう。また "Annals" のように多数の一般購読者がえられない、などの問題が残るなど、わが国では実現がなかなか困難な状況である。

学会前日に postgraduate program が行われた。各領域のトピックスについての教育的講演がなされたが、参加者は1000人以上の多数であった。呼吸器外科学会でも昨年の前田会長の時から、総会の翌日に呼吸器セミナーが始まったが、今年の藤村会長、来年の私が主催する総会でも継続して、その内容を充実させて行くことができると願っている。

“Annals”の編集委員長の Dr. Ferguson と話すことができた。昨年の投稿総数が1700余りであり、うち約半数は米国・カナダ以外からであり、日本が最も多く217と国外からの投稿の24%を占めている。実際“Annals”に掲載されたのは原著273、症例180であり、採用率は約50%である。しかし原著のうち STS で発表された演題は必ず採用されるので、一般投稿からは極めて厳しい採用率ということになる。事実、帰国後昨年の“Annals”を調べてみると日本からの投稿で掲載されたのは原著30、症例18の48編であり、採用率は22%であった。本邦学会誌を英文誌にする動きもあるが、多数の論文が国外誌に投稿されている現状では、本邦英文誌が国外で reject された投稿の「駆け込み寺」的存在になることが危惧され、十分検討を要するというのが率直な印象である。

今回の会長は Dr. John R. Benfield である。「Metamorphosis」と題する格調の高い会長講演であった。来年の呼吸器外科学会には、1957年朝鮮戦争従軍中に金沢での第10回日本胸部外科学会以来、丁度40年振りで招請講演のため来沢して戴けることになっている。ご本人も張り切っておられ期待して載きたい。